

2009年9月15日（火）16：00-17：00

鼎談：「企業と文化」

福武 総一郎 ベネッセコーポレーション 代表取締役会長兼CEO

米倉 誠一郎 一橋大学イノベーション研究センター長・教授

出井 伸之 クオインタムリープ株式会社 代表取締役

本セッションでは、まずベネッセコーポレーション 代表取締役会長兼CEOの福武 総一郎氏が、ベネッセにおける地域活性、文化振興、環境等に関する取組みについて講演を行い、その後、一橋大学イノベーション研究センター長の米倉誠一郎教授、及びクオインタムリープ株式会社代表取締役 出井伸之両氏を交えた鼎談が行われ、企業の新たな文化創造に関する役割やその重要性について討議された。

<福武 総一郎氏 講演>

富の創造は企業活動によってのみ可能であり、富を創造する企業の活動は基本的には自由である。従って売上・利益・知名度等の向上を求めるのは当然だが、一方これからの企業は利益の使い方や株主のあり方を考え、社会や世界からリスペクトされる存在を目指していくことが問われている。

経済活動は目的ではなく手段であり、目的は次世代の人々が幸せになることである。そのためには、大量生産大量販売から、「ある物を活かして、ない物を創る」時代への転換、また極めて重要な問題である地球温暖化への対応、金融資本主義から、人々の公共の利益の追求を目指す公益資本主義へ向かうことなどが重要であると私は考える。

ベネッセにおける具体的な活動例として、直島の地域づくり、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」への協賛、さらに電気自動車領域で環境と調和する事業を展開する株式会社SIM-Drive（シムドライブ）社への出資について紹介する。

直島は、約20年前より建築家安藤忠雄氏の協力を得て開発。当時過疎化・荒廃が進んでいた同地を現代美術を使って再生に導いた。現代美術は若い人々や都会に向くと思われるが私はそうは考えなかった。単なる保存ではなく、美術作品や建築などを通して日本の良さを再構築する取組みを行い、世界でも高く評価されている。また新潟県十

日町市で開催している「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」には、イベント開催期間中に40万人もの人々が来るようになった。多くのアーティストが関わり、古い民家の再生を始め、現代美術を通じて過疎の町を元気にする活動として展開してきた。

マズローの欲求5段階説は、不十分であると思う。現状の説は自分だけよければよいという構造だが、実はこの上に「コミュニティ発展欲求」があると思う。個人の幸せは「いい地域」が基盤としてあってこそ成り立つ。「いい地域」とは人生の達人であるお年寄りの笑顔がいい所である。現代美術で若者を呼び込むことでそうした地域を作ろうと思った。越後妻有サポートサイト (<http://www.echcigo-tsumari.net>) では「ふるさと納税」制度を利用した寄付の推進も行っている。興味のある方は協力をお願いしたい。

8月に電気自動車の会社である、株式会社SIM-Driveを設立した。子供たちの未来を守るため温暖化に対応すべく、電気自動車を一気に普及させるため、技術の独占という形ではなくオープンソース方式で展開していく。電気自動車であれば、名車の内外装の活用など新しい試みもできる。電気自動車についての最高の技術と情報を、この分野に興味を持つ全ての組織や人々に、わずかな費用で提供するのが同社のコンセプトである。

金融資本主義から公益資本主義への動きに関連し、85年から当社関連の4つの財団がベネッセの6%強の株式を持って学術、教育、文化、地域振興ならびに美術館の運営をしている。株式会社、上場会社はこういう活動を積極的にやってみたらよい。世界の将来に資する価値観こそ重要で、それに基づき新しいことをやろうと思えばできるのだ。

<鼎談>

まず米倉氏が、直島に実際訪れ、資本主義の形態の多様性について改めて認識した旨述べ、以下の通り続けた。資本主義を、アングロサクソンが作った狭い枠組みの中でのみ捉える必要はなく、日本にもずっとあったものだし、バングラデシュのマイクロファイナンス機関であるグラミン銀行などが提唱しているのもその一例だろう。資本主義は富を得るには重要な仕組みだが、多様な形で存在しうる。その新しい形を日本から発信

することは大変重要なことである。

ある目的を持った財団に企業の株式の一部を持たせ、企業が利益をあげることで財団にも利益配分があるという福武さんの考える公益資本主義も決して荒唐無稽な話ではない。この形態では株主の利益が損なわれると思う方がいらっしゃるかもしれないが、その会社や財団の考え方に賛同した人がその株式を買えばよいのであって、無目的でアドホックな社会貢献費や使途不明金に使われるよりはよっぽど明確だ。そもそもカンパニーとは、一緒にパンを分かち合って食べる仲間のこと。一つの目的に対するリスクを分散し、共通の冒険的事業を進行するための組織であって、それがいやなら株を買わない、すなわち参加しなければいいだけの話である。

これを受けて福武氏が、オーストラリアに日本人のための学校を作るという活動についても紹介した。同氏は、「グローバリゼーションと言われているが日本の教育はまだそれに対応できていない。福武氏の考えでは教育にはパターンがあり、歴史的背景から欧州はガバナンス、アメリカは経済、日本は一流の人を集めて日本を良くしていくという狙いに基づき高等教育が成り立っている。一方長い歴史を持たないオーストラリアはスキル・職業教育に重点を置いている。単なる語学留学にはあまり意味がながく、スキルを学びに行く、スキルを学ぶために語学が存在するという形が本来の学び方だと思う」、と述べた。

出井氏の、「公益資本主義を広めていこうと思っているか」との問いに、福武氏は、「直島の例などは普通の会社でもできると思う、直島について言えば、86年、瀬戸内海などを回った際に、刺激・競争・緊張・娯楽に溢れた都会に疑問を持ち、土・水・光など自然が本当に大事だと実感したことが開発の契機であった。日本には借景という文化が昔からあるが、自然を切り取る建築家安藤氏と組んで、人と違うことをやってきたと思っている」と述べた。

米倉氏の、「日本は高度成長の中で瀬戸内等世界でも最も美しい所を破壊してきたが、単なる復活でなく現代美術で復活させようと思ったのはなぜか」との問いに対しては、福武氏は「父親が美術品のコレクターであったこともあるが、直島に実際に行くようになってひらめいた、ひらめきのこっは、寝る時、起きた時、まどろみの中でイメージーションすること」、と答えた。本やロジックではアイデアはでない。

さらに、SIM-Drive の現在及び今後の展開について、福武氏は、「電気自動車の普及を目的に、新たな開発体制やプロモーションを考えており、仕様書作成や、量産時にお

いて、パートナー企業から資金を得る形も進めたいと思っている」と言及した。出井氏が、「車、自動車産業をもう一度再定義してくれることを期待している」と述べ、米倉氏は、「従来の車は、ピストンの縦運動の横運動への変換という非効率でかなり難しいことをやってきたが、電気モーターであれば取り付ければ回転運動を回転運動にするだけでよく、20世紀に信じてきたものを根底から覆す技術である」と評価した。

最後に福武氏は、「私は時代の変わり目を、それまでの主役が脇役に、脇役が主役になる時代と定義しており、20世紀は男性と若者が主役だったが、これからは、女性、高齢者、子供、地方が主役になる時代であると思っている、その実現に向けて、支援していきたい」と述べた。

<質疑>

石田宏樹氏（フリービット株式会社代表取締役社長 CEO）：ベンチャーの世界もインターネットで変化のスピードが早くなっているが、主役は必ず転落すると考えられるのだろうか。

福武氏：その通りであり、だからこそ、脇役にならないため主役は組織を分化していくことが重要。ベネッセも10月より持株会社体制へ移行する。分散化した組織のどこかが大きく育つことが重要で、分化させるためには積極的な分権化が必要である。出井氏も、大きな組織は分化して生き残りを図るのは当然である。

最後に米倉氏の、日本は、日本発の新たな資本主義形態、また知識創造に関する新たなイノベーションのパターンを作り発信していかなければならないとの言葉で、本セッションは終了した。